

# 月の絵本

——無生物とのコミュニケーションを描いたナラティブ——

関 沢 英 彦

## 目次

### はじめに

1. 無生物とのコミュニケーション
2. 絵本という情報デザインと月
3. 月の絵本における 20 の主題
4. 月とのコミュニケーションの意味

### はじめに

月が登場する絵本は数多く出版されている。国立国会図書館の蔵書検索において、国際子ども図書館所蔵のものを検索すると、「お月さま」が書名に含まれる絵本（童話を含む）は、181 件となる（国立国会図書館、2015）。

ちなみに『万葉集』において、月の歌は約 180 首である。風の歌 135 首、雲の歌 120 首、太陽の歌 22 首に比べて群を抜いて多い（宮元、2003：72）。国際子ども図書館所蔵の図書の検索においては、「お月さま 181 件」に対して、「風 80 件」「雲 67 件」「お日さま 100 件」が出現する（ちなみにお星さまは 38 件、星は 68 件）。千数百年の時の違いを超え、あるいは年齢を超えて、月という主題は、人々の心を捉えてきたのである。

アメリカで入手できる絵本について、amazon.com で「picturebooks moon」を検索すると 171 件の作品が存在する。「picturebooks wind」42 件、「picturebooks sun」68 件に比べて、月を主題としたものは他よりも格段に多い（cloud は雲以外の意味を表すものが大量に含まれるので除外）。

「月とその神秘は、子供のための文学というジャンルが生まれて以来、今日に至るまで、その一角を占めてきたのである」（Warner, 1999：2）

本稿は、月を主題にした絵本を対象とする。そこでは、主人公が、月と何らかのコミュニケーションをしていることが多い。それは、なぜだろうか。どうして無生物である月とコミュニケーションをする物語が数多く作られるのだろうか。以下、月が登場する 132 冊の絵本

(文末にリストを掲載) を分析することで、その背景にあるものを探っていくことにする。

## 1. 無生物とのコミュニケーション

保育所保育指針(平成11年版)によれば、4歳児の特徴として、「この時期の子どもは、心が人のみではなく、他の生き物、さらには、無生物にまでもあると思っている」(厚生省, 1999: 27)とされる(平成20年改訂の「保育所保育指針」では、頁数が半分になった関係上、引用部分は省略されている)。平成11年版保育指針に記されている幼児のアニミズム的思考については、ピアジェ(1947=1955)に始まる研究の歴史がある。

現在、幼児において、何を生き物としてとらえるかという研究には、4つの主要な問題があるといわれる。(1)何歳から生物を無生物から区別するようになるのか、(2)生物と無生物を区別するのはどのような情報か、(3)この区別がどのように幼児による世界の概念的理解に組み込まれるのか、(4)そして、こうした生き物を区別するメカニズムはどのようなものかという4点である(Opfer and Gelman, 2011: 214)。

いずれにしても、年齢や個人差はあるが、基本的に「幼児は、動物や植物はいうまでもなく、石ころや棒きれのような無生物にいたるまで自分と同じように心があり生命があると思っている」(尾崎, 2005: 62)。6歳前後でも、「太陽、雷等の無生物を生きているとする子どもは多い」(落合, 1993: 114)ようだ。絵本においては、当然のように無生物とおしゃべりをする場面が出てくる。先に触れたように、月は、そうした無生物の中でも人気者である。

ところで、大元(1988)は、5・6歳児40名に対して、絵本を読み聞かせる前後に2回質問をした調査結果を分析している。最初の質問で「月が生きている」と答えた率が低かったグループに、絵本『つきのぼうや』(福音館書店)を読んで聞かせると、生きていると思う率が上昇した。逆に「月が生きている」と思う率の高いグループに、自然科学的な図鑑『月のかんさつ』(講談社)を読んで聞かせると、生きていると思う率は低下したという(大元, 1988: 276)。絵本の内容が一定の影響を与えることを示している。現実の生活においては、通常、子供たちは『つきのぼうや』のようなファンタジーと、『月のかんさつ』に代表される自然科学的思考の双方に触れることになる。その結果、均衡の取れた発達を示していくのであろう。

ちなみに大元の調査対象者40名のうち、最初の質問で、「月が生きている」と答えたのは20人だが、そう考える理由としては、「うごく(でてくる)6人」「ついてくる4人」「うさぎがいる3人」「ひかる3人」などであった(大元, 1989: 47)。

このように幼児が、無生物にも心を感じることは、アニミズムを越えて、擬人化と呼ぶべきかも知れない。アニミズムは、無生物にも命があると考えることである。擬人化は、それに加えて対象に対し、人間のような内面や心理を想定することとされる(Epley, Waytz and

Cacioppo, 2007 : 865 ; Guthrie, 1993 : 62)。

我々が、既に検討したように、擬人化を生み出す動機としては、社会性動機と効力動機がある（関沢，2012）。社会性動機とは、他者との社会的なつながりを持ちたいために、対象物を人間のようにみなす場合をいう。従って、孤独を感じている人の方が、擬人化をしがちということになる。効力動機は、働きかけることで相手の反応を引き出し、周囲を予測可能な状態にしておきたいという動機である。何事も自分で管理したいという人に見られる擬人化の傾向であるといえる（Epley, Waytz and Cacioppo, 2007 : 866 ; Epley, Akalis and Cacioppo, 2008 : 146）。

後で触れるように月が登場する絵本においても、寂しさの中で、月を擬人化し、コミュニケーションする場合と、遠くにある月に対して主人公が働きかけたいために擬人化をする場合に分かれる。

ところで、月が無生物の中でも、特別な存在であることは、先に触れた5・6歳児の言葉にも示されている。「うごく（でてくる）」「ついてくる」など、天空を移動し、見ている人がどこにいても、同じ場所にあり、追いかけてくるように見えるのである。

しかし、歴史的に言えば、何よりも、その満ち欠けの姿が人々に、あたかも生きているような印象を与えたと考えられる。夜ごと空を見上げる人々は、「三日月から満月へ、また三日月になり、闇夜をへて、ふたたび三日月へと変化しつづける月は基本的な物語、つまり誕生、成長、充実、衰退、死、そして再生という変容の物語」（Casford, 2003=2010 : 17）に魅せられてきたのである。

## 2. 絵本という情報デザインと月

幼児においては、年齢や個人差はあっても、月を生きている存在として感じ取る場合が多いことを見てきた。従って、絵本のなかで、月と会話をするシーンが出てくるのも不思議ではない。もっとも、絵本という虚構の世界であるから、現実は無生物が心を持ち、我々とコミュニケーションできると信じている必要はないともいえる。

ところで、先に示した国際子ども図書館所蔵の図書の検索では、「お日さま」も100件出現する。太陽と月は、昼と夜を代表する主人公として、絵本に数多く登場する。太陽の場合、朝日や夕日を別にすると、直視できない。そして、太陽光はあまねく地上を照らすのに対して、月の場合は、夜空の一点に輝くために、人々は対象を凝視することができる。また、月相があることが変化を生み、ドラマを生み出しやすい。

我々は、かつて絵本における情報デザインの特徴について、3つの視点から明らかにした（関沢，2012）。まず、絵本は、「情報内容の設計」において文脈が単純化される。幼児にとって、絵本は大人に読んでもらう媒体である。従って、絵本を前にした幼児は、読者ではな

## 月の絵本

く、視聴者（Cadden, 2005：59）と呼ばれることも多い。彼らが理解できるようにと、複雑さを回避し、分かりやすい物語になっている。月が登場する絵本の場合、後述する 20 の主題に見られるように、主要な登場人物（動物）は少数であり、込み入った文脈の物語も見当たらない。

絵本の 2 つ目の特徴として、送り手と受け手の「関係性の設計」において、身近な対象が取り上げられることがあげられる。物語の中で、冒険が行われる場合も、幼児の生きる「小さな世界」を起点とし、最後には、そこに帰還する。その点、月は、幼い子にも親しみが持てる身近な素材であり、しかも、地球上、どこでも同じように見ることが出来る天体である。従って、翻訳された作品も感情移入がしやすい。

いうまでもなく、「情報チャネルの設計」の特異性は、絵本における最大の特徴である。絵本では、コミュニケーション経路としての言葉と絵は、同等の重みで扱われる。いいかえれば、絵本はマルチモダリティという特性を有する。ここで、マルチモダリティとは、「記号的なモノやコトを作り出すときに、いくつかの記号的なモードを使うこと、そして、各モードの特有な組み合わせ方」（Kress and Leeuwen, 2001：20）として定義される。

月が登場する絵本におけるマルチモーダルな特性として、次のような点が上げられる。絵画的には、青色や紫色の夜空に、黄色または橙色の満月や三日月が描かれ、物語が進行する。視覚的表現として、寒色と暖色の対比、月相による形の変化、月光の水への反映など、様々な展開が可能になるのである。登場人物（動物）を描写する場合も、見上げるという身体動作で、月への関心を視覚的に示せる。太陽の場合は、雲間に隠れているときを除けば、見上げるという行為はあまり見られない。朝日や夕日を眺めるために、遠い地平線に目をやるという形になる。

言語的表現としては、月見のように集団として大騒ぎをしながら、月と関わる場合もあるが、後述するように孤独な主人公が、月と少ない言葉数でコミュニケーションをする静かな物語が多い。「太陽は直接見るのにまぶしすぎるが、月はゆっくり眺め、それについて思いをめぐらすのに向いている」（Brunner, 2010=2012：11）といわれるが、太陽のもとにある主人公は、その光に照らされている現実世界を志向するのに対して、月の光を見る主人公は、思考や感情が内向する傾向を示すといえる。

### 3. 月の絵本における 20 の主題

本稿では、月が登場する 132 冊の絵本を分析した。選んだ基準は、月との相互作用がある、月が擬人化されている、月の特性（月相・潮の満ち干）を扱っている、月の出ている夜そのものに意味がある、月の伝承を取り上げているなど、月を正面からテーマとしているものとした。

図表 1 月の絵本 132 冊における 20 の主題と作品数

| 主題         | 内容            | 作品数 |
|------------|---------------|-----|
| 1. 月の守護    | 月は見守ってくれる     | 26  |
| 2. 月との邂逅   | 月と会いたい気持ち     | 25  |
| 3. 月と孤独    | ひとりぼっちだから月と語る | 22  |
| 4. 月見      | みんなで月見の準備     | 21  |
| 5. 月の随伴性   | 月はどこまでもついてくる  | 18  |
| 6. 月との会話   | 月とおしゃべり       | 17  |
| 7. 月夜の旅    | 月夜はさまよいたくなる   | 14  |
| 8. 月を世話    | 月を守ってあげたい     | 12  |
| 9. 月への往還   | 月に行って見たい      | 12  |
| 10. 月の行為   | 月が意思を持ち行動する   | 9   |
| 11. 月夜の出会い | 月夜には誰かに出会う    | 9   |
| 12. 月と食欲   | 月を食べたくなる      | 7   |
| 13. 月の満ち欠け | 月相への様々な感情     | 6   |
| 14. 月と兎    | 月と兎の特別な関係     | 6   |
| 15. 月と死者   | 月は死者の場かも知れない  | 5   |
| 16. 月の奪取   | 月を独占したい       | 5   |
| 17. 月は媒体   | 月は思いを伝えてくれる   | 4   |
| 18. 月の人格   | 月も感情を持っている    | 2   |
| 19. 潮の満ち干  | 潮の満ち干と生き物     | 2   |
| 20. 月夜の魅力  | 月夜の特別な雰囲気     | 2   |

(筆者作成 複数の主題を持つ絵本もあるので、作品数の合計値は 132 冊を超える)

モーリス・センダックの有名な『かいじゅうたちのいるところ』(Sendak, 1963=1975) は、母親に叱られて寝室に入れられた主人公マックスが、寝室の中から怪獣のいる世界へ航海をする物語である。長い航海を終えて部屋に帰ると、母親が夕食をテーブルにおいてくれる。一瞬の間の夢かと、幼い読者は納得するのだが(あるいは読み手はそうって子供に説明するのだが)、何度か読み返すと、物語の最初では三日月だった窓から見える月が、最後の方では満月になっていることに(子供や読み手が)気づくという仕掛けになっている。このように月が狂言まわしになっている例もあるが、月そのものを主題にはしていないので、今回は分析対象としていない。

132 冊の内外の絵本を見ていくと、月を巡るナラティブは、20 の主題にまとめられること

## 月の絵本

が分かった。いうまでもなく、1つの絵本に複数の主題が含まれている場合も多い（図表1参照）。以下、主題ごとに作品を見ていく。

### 3-1 主題1——月の守護

月が登場する絵本132冊において、約2割の作品が、「月が見守っていてくれる」という「月の守護」を主題として取り上げている。作品65（文末絵本リストの番号）『おつきさま』において、文章を担当したやすいすえこは、表紙カバーに、「子どもの頃、お風呂やさんからの帰り道、お月さまが見ていてくれたから、こわい夜道も、夜の散歩道になった」（やすい，2001）と記す。絵本のなかで、迷子になった犬は、「おつきさま、どうかかえりみちをおしえてください」と願う。野原のネズミの兄弟は、「ねえ、おにいちゃん、おつきさまがほくたちのことみている」「うん、きっとほくたちのことがだいすきなんだね」と会話する。そして、広大な畑のなかに立つカカシは、「こわくない こわくない ながいよる、おつきさまが ほくをみていてくれるもの」とつぶやく。

作品37『おつきさまとあそんだよる』では、夕暮れ時、遊び仲間が帰宅してしまった公園で、誰かがクマの子を「じっとみつめて」いる。「そらにぼっかりうかんだ、おつきさま」が注視している（とクマの子は思う）のである。作品52『つきのよるに』は、カモシカとおぼしき母子が登場する。子供がある程度成長すると、「獅子の子落とし」のように、母カモシカは、子供を谷に突き落として去っていく。ひとりになったカモシカは、自力で立ち上がり、歩き出す。そして、母を恋しがる。だが、やがて立ち直り、「ほくが おつきさまをみあげると おつきさまは ほくをじっとみていた。ほくはすこし げんきにあるいた」。そして、「ひとりぼっちでもさみしくないよ！ いつもおつきさまがいっしょだから」と独り立ちをする。

「乳児と大人とのコミュニケーションは『見る・見られる関係』（face-to-face interaction）による直接的コミュニケーションに始まる」（天野，2009：31）といわれる。乳児は、全幅の信頼をよせて、保護してくれる大人の目を見つめる。「見る」「見られる」という視線の交差が、コミュニケーションを成り立たせる。大人が視線を外せば、泣いて、ぐずることもある。だが、やがて大人の視線の先をともに見る「視覚的共同注視（joint visual attention）」ができるようになる。この現象は、乳児にとっては、「自分の外に他者（大人）と共有する世界をもったことを意味する」（天野，2009：31）といわれる。

絵本を、大人が読み聞かせすることは、意図的な「共同注視」の時間を設定することである。月が登場する絵本においては、「月を見る」と同様に「月をともに見る」という状景も数多く出現する。加えて、興味深いことは、絵本の主人公たちは、月を「見る」とともに、無生物である存在の月から「見られる」という感覚を抱くことである。これは、我々が現実を感じることもである。無生物を対象にして、「見る」「見られる」の関係が生ずる状況は、

月のほかにはあまり想定できない。

廣野（2009）は、『視線は人を殺すか』の中で、「視線は、それを投げかける人間、あるいは投げかけられた人間に、さまざまな意味を読み取らせ、心理的作用を及ぼし、さらには相互の関係をも変えうる可能性を孕んでいる」（廣野、2009：2）と述べる。

先に引用した作品 65 を制作したやすいすえこは、幼児の頃の思い出に続けて、大人になってから、「ある夜、病気の友だちの回復をお月さまに祈っていた時、はっと気づいた。もしかしたら、私が困難の波にのまれていた日々、私の心身を案じ、誰かが祈ってくれたかもしれない。私が友だちを思い祈っているように、お月さまは、ひとりで困難を乗り越えたと思っていた私に、あの夜、『感謝』を教えてくれた」と書いている。人は、月という無生物との「見る」「見られる」の関係の中で、何らかの発見をし、時には、月の「メッセージ」を読みとりながら、月との関係を深めていく。「月の守護」を主題とする絵本は、その第一歩なのだろう。

### 3-2 主題 2——月との邂逅

物語とは、「時間軸にそった出来事の選択的構造化」（浅野、2001：62）と定義される。今回、月の登場する絵本 132 冊において、月と出会うことによって物語が始まるものは、25 作品であった。この「月との邂逅」という主題の場合、「月の守護」とは異なり、月と主人公の関係は、「見る」「見られる」を越えて、より直接的な接近・接触の状況に進む。

作品 1『おつきさんのぼうし』では、帽子屋のおじいさんが、魔女、海賊の船長、手品師に帽子を作ってあげる。それを空から見ていた月は、うらやましくなる。自分も帽子を欲しくなって、「あるひ、おつきさんは、『こんばんは』とおじいさんにこえをかけました」という話である。月と帽子屋が出会う場面は、手前に大きな机があり、おじいさんが夜なべ仕事をしている。その向こうに大きな窓があって、目鼻のある月がのぞき込むという絵である。結局、魔女、海賊の船長、手品師のシルクハットの 3 種類の巨大な帽子を月は手に入れる。視覚的な変化もあって、絵本の持つマルチモダリティの機能をうまく活かしている。

作品 24『おつきさまとちいさなくま』は、お月様のことを大好きなこぐまが、ボートをこいで、一方的に月に会いに行く物語である。月への憧れの想いがよく表れている。一方、作品 27『お月さまにいたるのはだあれ』は、逆に月の方が、「こちらにいらっしやい」と誘ってくる。この絵本は、モンゴルからの留学生である作者が、モンゴルと日本の 2 つの物語を 1 冊にまとめている。モンゴルの話は横書き、日本の話は縦書きで進み、センターの見開き頁で両者が出会う形式である。モンゴルの草原にアノーという女の子がいる。ある夜、月といっしょに遊ぶ。すると、月が、「アノー、こっちにいらっしやい。お空でもっとたのしくあそびましょう」という。アノーはうなずくと、馬で月まで走っていく。日本の物語の方は、若いウサギのぴよんたが主人公である。村の祭りを見ていた月は、うらやましくて、とうと

## 月の絵本

う寝込んでしまう。ぴよんたは、月にだんごをもっていくことにした。月は喜び、日頃、どれだけ寂しいかをぴよんたに嘆く。その言葉を聞いて、ぴよんたは月に残るのである。

見開き頁で、モンゴルの草原と日本の畑がつながり、空の月の中では、アノーとぴよんたが踊っている。作者は、月にウサギがいるという日本の伝説と、月には女の子がいるというモンゴルの伝説が会おう形で、表現したと企画意図を記している。絵本のマルチモダリティという特性が、この本でも効果的に活かされる。左から右へとモンゴルの物語は進行する。日本の物語は、右から左へと進む。そして、センターの見開き頁で、モンゴルと日本の伝説が一つになる。月を仲介にして、2つの文化が邂逅するメッセージが伝わってくる。

作品 32『おつきさまのやくそく』は、父の帰りが遅い夜、ひとり留守番する男の子を、あばた面の月が慰めにやってくる話である。今回の 132 作品において、父と子、母と子という家庭は何組も登場している。作品 35 *When the Moon Forgot.* は、川に落ちている月を、男の子が拾って家に持ち帰るところから物語が始まる。作品 96『月光公園』は、夜中に目覚め、公園に行くと、月が降りてくる。そして、月の少女が「いつも、あなたを、見てる……」という。作品 106『ぼくのともだち おつきさま』は、ボートを漕いでいて月に会い、家に招く話である。「いっしょにいただけでたのしい」「ぼくのすきなほん よんであげたの」と主人公はいう。作品 123『つきとあそぼう』は、空を浮遊しながら、月とたわむれる三角帽子の男の子が主人公である。

ところで、「月との邂逅」という主題を巡っては、月自体が、現世に降りてきて、また、帰って行くものと、地上から主人公が月へ行き、擬人化された月に会って帰還するものという 2つの形が見られた。

糸井・高橋（1992）は、異郷と現世の往来という物語の原型を分析している（糸井・高橋, 1992）。異郷から地上にやってくる、帰還していく『竹取物語』のタイプと、逆に現世から異郷に赴き、また、現世に戻ってくる『浦島太郎』のタイプである。今回の月との往還の主題を巡っても、2つの物語類型が見られた。

### 3-3 主題 3——月と孤独

図表 1 で示した 20 の主題において、「月の守護」「月との邂逅」「月の随伴性」「月との会話」「月と死者」「月は媒体」「月の奪取」など、多くの主題において、背景には寂しさが隠れている。興味深いことは、主人公が孤独であるとともに、月もそうした感情を抱いていると描かれる場合が多いことである。月には、それを見る人の感情を映し込む鏡のような側面があるのだろう。ここでは、とくに寂しさが前面に出ているものを「月と孤独」（22 件）という主題として検討する。

いうまでもなく、詩や俳句の歴史において、月と孤独を歌ったものは多い。中国では、8 世紀の王維と李白の詩がとにもよく知られている。王維は、「竹里館」という作品で、「深い

竹藪の里にある館で、琴を弾き、詩を吟じる。人にも知られず、訪れる者もない。ただ、明るく輝く月が、私を照らしていてくれる」という趣旨を物語る。李白は、「月下独酌（四首）其二」で、「……杯をかかげて、満月を待つ。自分の影と向かい合って、月と自分と影と3人である。月は飲む気がないので、自分の影と飲む……」と歌う。李白の場合、最後の聯では、「来年も月と飲む約束をした」とあるなど、王維の孤独ほど切実ではないが、いずれにしても、月下の独酌を歌った漢詩には寂寥感が表れている。

俳句においては、蕪村の「月天心 貧しき町を 通りけり」がある。深夜、月が中空にある。月の光を浴びつつ、貧しい人々が寝静まる町を通り過ぎる……という内容は、今回の絵本のなかにも、同様の状景がいくつも見いだされる普遍性を持っている。尾崎放哉には、「こんなよい月をひとりで見て寝る」という句がある。放哉は、「せきをしてひとり」という句も作っているように孤独感の漂う作品が多い。

Keats (1818) は、4050 行からなる物語詩『エンディミオン』で、“What is there in thee, Moon! That thou shouldst move My heart so potently?” (III 143-144) と歌った。月の光は、人の心を深いところから揺り動かす。もちろん、絵本においては、そこまでの強い情念は描かれない。だが、幼い子にも、月を見て、「何か、気持ちちが波立つ」といった瞬間があるのだろう。昼間は、覆い被されていた孤独感を感じるのである。

作品 34『ちいさなうさぎ つきのよるのおやくそく』は、「でも、みんながねはずまったしずかなよる、ひとりぼつちになったちいさなうさぎは、おつきさまをみあげておもうのでした」という寂しさを感じている白ウサギが主人公である。だが、公園で茶色ウサギと出会うことで、いつか、そうした日常が変わっていく。作品 86 *The Night the Moon Blew Kisses* は、月の孤独を鋭く感じとる女の子の話である。祖母と歩いている夜、祖母が、「お月さまがさびしそうだねえ」という。女の子は、指先で、月に投げキスをする。すると、月からキスが返ってくる。雪が鼻や額に落ちてきて溶ける。雪が、月からの返礼のキスである。祖母、孫、月の繊細なコミュニケーションが描かれている。作品 93『ねむれないよるは』では、ベッドの中で寝付かれずに子犬が寂しい思いをしている。月は、その子を見ている。子供部屋でひとりぼっちの子犬と、宇宙の中でひとりぼっちの月が、響き合う。小さな独唱で歌われる子守歌のような絵本である。作品 130『つきのオペラ』は、「さびしそうなかおのおとこのこ」であるミシェル・モランが主人公である。彼には、両親がいない。「おつきさまのこ」とも呼ばれている。なぜなら、「おつきさまが そらにひかかってさえいれば うれしがっていたからです」。ここにも孤独な魂と、月との共鳴がある。作品 87 *I See the Moon an the Moon Sees Me*. の表紙では、男の子が、暗い部屋にひざをかかえて座って、窓の外満月を見ている。足下には、月の光が届いて明るい。先に触れたようにここには、「見る」「見られる」の関係がある。男の子の表情からすると、何か物思いにふけっているようだ。

月と孤独という主題は、寂しいだけでは終わらずに、見られることによって月に守護され

## 月の絵本

ている感覚にもつながる。逆にいえば、だからこそ、寂漠とした心を抱くとき、子供も大人も、月を見上げるのだらう。吉田兼好も、「よろづのことは 月見るにこそ慰むものなれ」『徒然草 第21段』といている。

### 3-4 主題4——月見

いままで見てきたように月の絵本は、個人性・孤独感が色濃い作品が多い。だが、月を巡る物語には、「月見」という集団性・祝祭感に富んだ主題もある。月見は、古来の農耕儀礼であり、また、名月を愛でる観月として中国から入ってきた風習であるともいわれる。京都の観月の名所の地に建てられた桂離宮は、「各季節の月の出の方位をもとにした仕組みを持つため、桂離宮の建築と庭園は月の運行と一体となっている」（宮元，2003：22）。春，秋，冬などの季節に合わせて、「月の出を何物にも邪魔されることなく正面から捉えることができる」（宮元，2003：22）という桂離宮は、まさに月を鑑賞する宴が、いかに重要であったかを示している。

今回の絵本を一覧して気がつくのは、「月見」を主題とする作品（22件）の場合、登場人物（動物）の数が多いことである。幼児向けであるから、酒は出ないが、お団子を前にみんなでパーティーをする場面とか、月見の準備のあわただしさを描いた賑やかで社交的な物語になっている。

作品12『ねこまるせんせいのおつきみ』は、黄色の園児服の男の子と、前掛けをした虎猫が宇宙空間に浮いている表紙である。その向こうには、月が微笑んでいる。こども園「こごかなえん」の見習い先生のねこまるせんせいとこうちゃんが、ひょんなことで、月の「お月見」に参加することになる。月の世界の月見は、「あおいほし」の地球を眺める行事である。二人は、月の兎にすすきのロケットに乗せてもらう。無事に地球に帰還した二人は、地球の十五夜に間に合うという物語である。月での「お月見」の場面では、19人の登場人物（動物）がずらっと並ぶ。作品15『じっちょりんとおつきさま』では、正体不明のじっちょりんがお月見の準備をする。作品16『ぶたさんちのおつきみ』は、家族のぶたさんのお月見風景を描く。作品17『うみやまてつどうさいしゅうでんしゃのふしぎなおきゃくさん』においては、山奥行きの最終電車で、なぜか、たくさんの客が乗る。そして、ぼんぼこ山駅でみんなが降りる。ところが、駅長がうけ取った切符は、すべてが葉っぱであった。その頃、ぼんぼこやまでは、満月のもと、たぬきのお祭りが開かれている。その他、ナマズのぼんたの月見（作品18）、カエルたちの月見（作品29）、お月見の日は他家の月見団子を泥棒してもいいという話（作品31）、月見で月に見せる出し物に悩むイノシシの兄弟（作品44）、ウサギのうさんごろたちの月見に表れた偽のおつきさまを巡る騒動（作品51）、タヌキの月見（作品55）、こびとの世界の月見（作品61）、クマのピアノ、ウマのベース、ネコのドラム、イヌのサックスによる月見の音楽会（作品71）、ネズミのボサム主催の月見パーティー（作

品 78), タクシー運転手が家族とする月見の準備をする話 (作品 121) など, 多彩である。共通するのは, いずれも祝祭気分が溢れていることだろう。

### 3-5 主題 5——月の随伴性

幼い子供は, 月がついてくるという感覚を抱く。自分が移動しても, 同じように月が見え続けるからである。作品 6 *Max and the Tag-along Moon*. は, 祖父の家を一家で訪ねた男の子マックスが, 満月の晩に家へ帰るところから始まる。祖父はマックスを抱きしめる。その向こうに大きな月が浮かんでいる。いよいよ, 車は出発する。バックミラーにも月が輝いている。長い道のりだが, ずっと月がついてくる。橋のたもとで, 街の中でも, ずっとついてくる。だが, 雲に月が隠れてしまい, 男の子は心配をする。家に帰りついても, 月は見えない。だが, そのとき, マックスの寝室は, ゆっくりと柔らかい黄色の光で満たされていく。雲が去ったのである。マックスは, 光の魔法の玉を眺めながら, 祖父がいったことを思い出す。「お月さまは, ずっとぼくのために輝いているんだ」。ほとんど黄色系の色彩で構成されている視覚的イメージが, 絵本の効果を高めている。

作品 25『おつきさま こっちむいて』の表紙は, 遠い三日月を見上げる男の子と犬の後ろ姿である。主人公の頭は真後ろに倒され, 天を仰ぐ。そのために絵としては, 髪が下にたれさがり, 目鼻が上を向いている。それほど, 真上を見上げているのである。ママの自転車に乗っているときも, 顔は月を見上げている。作品 33『ねえ, おつきさま どうしてぼくについてくるの?』は, 月がついてくるように見える仕組みを説明する科学絵本でもある。だが, 最後に「でもぼく やっぱり ほんとうは ぼくのことを だいすきだから ついてくるんだ! って おもっていい? おつきさま?」「いいよ」と月は答える。自然科学の知見を知った上で, 「でも……ついてくるんだ! って おもっていい?」とクマの子は聞く。幼い子における科学とファンタジーの関係は, こうしたものでいいのだろう。作品 118『どこへいったの, お月さま』では, かくれんぼがテーマになる。木のうろに隠れても, 月はずっとついてくるのである。

月がついてくるという感覚は, 幼い子の抱く自然な感情だが, 同時に, 絵本においては, 「月の守護」とも関係する。「月の随伴性」という主題は, 「お月さまは, いつも, あなたのそばにいますよ」という形で, 庇護されている安心感を幼児に与えるためのナラティブでもある。

奥山 (2013) は, 死にゆく人を極限とするような生の意味喪失をケアするためには, 「その場から逃げずに, 傍らにいつづけ, 身を曝しつづける」(奥山, 2013: 11) ことが求められるという。もちろん, 月の絵本の幼い読者あるいは視聴者は, そうした追い詰められた状況にはいない。だが, 幼いながらも, ひとりぼっちの辛さをすでに知っている。だからこそ, 132 冊の絵本において, 孤独に関わる主題が多く見られるのである。

## 月の絵本

絵本に描かれたナラティブにおいて、月という存在は、「その場から逃げずに、傍らにいつづけ」てくれる。いいかえれば、絶対的な随伴性を特徴としている。また、「見る」「見られる」の関係において、雲に隠されない限り、つねに「身を曝しつづける」こともしてくれる。月という無生物のありようは、「存在を共にしている」（奥山，2013：24）という形で、幼い心にとっても、「見守ってくれる」存在として感じられるのだろう。

### 3-6 主題6——月との会話

作品9 *Red Knit Cap Girl* は、赤いニット帽の女の子が主人公である。彼女は、月と喋りたいと願っている。そこで、みんなとランタンをつるしてみると、月が見えなくなってしまう。フクロウがランタンを消してご覧という。真っ暗にすると、月はいっこと、「暗くしてくれたね、わたしが見えるように。声が聞こえるように、静かにしてくれたね。赤いニット帽のお嬢さん」と答えてくれる。少女は、月にささやく。月は微笑む。「ふたりは、いっしょに森の音を聞きました。赤いニット帽の少女は、いつもお月さまがそこにいることをしていました」という静かな雰囲気の話である。作品48 *I took the Moon for a Walk* は、「きのうの夜、お月さまをつれて、おさんぽにいった」という言葉から始まる。風と違って、糸も尾っぽもないけれど、歩くと後からついてきたと男の子はいう。ブランコを高くゆらしたとき、お月さまが「空を飛んでご覧」といったように感じる。次の見開き頁は、実際に、月と手をつないで、空を飛んでいる。家に帰ると、月はずっと家のそばにいて、甘い眠気を誘う光を投げかけながら、「ありがとう」といつてくれる。作品120『ほく、お月さまとはなしたよ』は、*Happy Birth Day, Moon* が原題である。ある夜、クマは、月を見上げて、「たんじょう日のプレゼントをあげたいな」と思う。そこで、月に問いかけるが、答えがない。遠すぎるからだろうと、クマは、川を渡り、森を抜け、山に登る。これで月と近くなったと、「こんばんは！」と大声で叫ぶと「こんばんは！」と向こうの山から声が返ってくる。

作品9では、実際に月が喋ったことになっている。一方、作品48は、月が「空を飛んでご覧」といったような「気がした」という言葉を使っており、最後の「ありがとう」も、平叙文の中で、月が「感謝した」という表現である。作品120では、山の頂上でクマが「こんばんは！」という時、「こんどは、クマくんの声が、山やまにはねかえってきた」とこだまであることを明記している。だが、クマ本人は、月が答えてくれたと思っている。

無生物である月との会話についての描写には、いくつかの方向性があることがわかる。現実の会話と同じように扱っている作品9、心の中の会話であるとのめかす作品48、こだまであると合理的な説明をしながら主人公は現実の会話と思いこんでいる作品120といった違いである。他の絵本においても、月とのコミュニケーションが描かれるときは、おおよそ、いずれかの類型に該当する。

絵本では、登場人物（動物）同士の会話は、通常、現実の会話として描かれる。動物の場合でも、そこに違いはない。対人的コミュニケーション（Interpersonal Communication）として扱われる。だが、月の登場する絵本では、無生物である月に関して、対人的コミュニケーションのように描写されるときもあれば、登場人物（動物）たちの個人内コミュニケーション（Intrapersonal Communication）として示されるときも見られる。個人内コミュニケーションとは、「内面的な独白、自分自身への内省、そして他の人々やまわりの環境についての内省など、わたしたちの内部で生じているコミュニケーション」（Watson and Hill, 2003 : 145）と定義される。また、個人内コミュニケーションは、自分と話すという意味合いから、セルフトークとも呼ばれる。ちなみにセルフトークは、内言（inner speech）と外言（outer speech）とに分類される（Vocate, 1994 : 7）。

内言は、沈黙した形での内面的な自己との対話である。外言は、「独語」であり、「私的発話」ともいわれる。内言についての研究で知られるヴィゴツキーは、「内言は、自分へのことばである」（Выготский, 1934=2001 : 379）と述べている。ヴィゴツキーの場合、「伝達としての言語を『外言』、思考の手段としての言語を『内言』と読んで区別した」（内田, 2008 : 122）。子供は成長に伴って、他者に対する言葉を内面化していく。その結果、「無言のことば」（Выготский, 1934=2001 : 388）としての「内言」を手に入れる。その過程で、「外言の形は残してはいるが、機能は内言と同じ」（内田, 2008 : 122）という自己中心語も増える。自己中心語が最も多いのは、5-6歳である（内田, 2008 : 122）。

先に指摘したように、132冊の絵本においては、月と登場人物（動物）の相互作用を、現実の会話として設定している作品、心の中の会話であるとのめかす作品、主人公は現実の会話と思いこんでいると描写する作品など、いくつかのケースが見られた。

ただ、全体として見るならば、実際にはセルフトークという形で、自分と話しているとみなすのが妥当である作品が多い。同時に月の絵本におけるセルフトークは、月という「想像上の相手」が想定されていることが多いので、Imagined Interactions（想像上の相互作用）と呼ぶこともできる。こうした想像上の相互作用は、通常は、現実これから会うか、または過去に会っている実在の人を相手に、心の中で言葉を交わすとか、イメージを描くことを指す（Honeycutt, 2008 : 77-79）。

想像上の相互作用によって、我々は、相手の言葉を反芻して、ますます怒りを強める場合もあれば、相手の愛情をかみしめることもできる。これから会う人に語るべきことを心の中で、練習する場合もあるだろう。いま・ここに、「現実の関係がないことの代償」（Honeycutt, 2008 : 80）として想像の中で、誰かと語るのである。絵本における擬人化された月との会話も、そうした「代償行為」といえる。

子供の場合、想像上の相互作用の対象は、イマジナリーコンパニオン（Imaginary Companions）と呼ばれてきた。想像の中で、作り出された友達である。かつては、「問題のある

## 月の絵本

子供の私的ファンタジー」(Taylor et al., 1993: 285)とみなされたが、最近では、そうした否定的な見方はなくなった。子供は、自分の心の中に、自分が語り、相手が答えるという演劇的な空間を作り上げているのである。

月夜の晩に、空を見上げてセルフトークをしている絵本の主人公は、お月さまというイマジナリーコンパニオンと会話をしているのだろう。月は、こちらを見守ってくれる友達であり、どこまでいってもついてきてくれる仲間でもある。

### 3-7 主題7——月夜の旅

作品 129 *The Moon Jumpers*. は、きわめて単純な物語である。絵は、30代の頃のモーリス・センダックが描いている。夏の日が沈む。最初の見開き頁は、左側に家があり、それを取り囲む芝生と森が見える。森の向こうには、月が出ている。右頁手前にいる黒猫が、「庭に出ようよ」と誘うかのように視線を読者に向ける。次の見開き頁は、家の中で、父親と母親が話をしている。4人の子供が裸足のまま、庭に出てくる。ひとりの男の子は、月に向かって両手を伸ばす。次の見開き頁は、男の子2人と、女の子2人が踊っている。家の垣根では、先ほどの黒猫が寝そべってみんなを眺める。次の見開き頁では、子供たちが逆立ちをする。構図的には黒猫も含めて、完全な五角形を構成している。森に入ってしまった4人は、月に向かってジャンプをする。黒猫が、木の上で見物している。次の見開き頁は、4人と1匹の帰還である。母親が心配そうに両手を広げて、「さあ、もう遅いわよ」といっている仕草が描かれている。最後の見開き頁は、家の屋根部分が大きく手前に描かれ、その奥に広がる森の上に大きな月がある。みんな寝てしまったようだ。夏の甘い夜の雰囲気伝わってくる。作品 22『うきわねこ』は、子猫のえびおが、祖父から浮き輪をもらう。その浮き輪に乗って、次の満月の夜、祖父と空を飛ぶ。満月のもと、赤と白の浮き輪にのっている2匹の猫の姿は、月夜に心が躍る「浮遊感」といったものを表現している。作品 74『つきよのくじら』では、月夜の晩に、クジラの母子が月のことを話している。それがきっかけで、子クジラは、父親クジラを探しに長い旅に出る。作品 81 *A Summertime Song*. は、蒸し暑い夏の夜、ルーシーは、かえるから誕生パーティーの招待状と魔法の帽子をもらう。月明かりを受けて小さくなったルーシーは小鳥のタクシーに乗り、動物たちとパーティーに急ぐという話である。夜は、子供にとって、「禁断の時間」である。「月夜の旅」を主題とする作品は、いずれも、禁を破って、月の光を浴びながら夜に遊ぶという子供たちの「願望」が表現されている。どの作品も、「月夜の旅」を主題とする作品は、月との直接的なコミュニケーションを描くというよりも、月夜という野外劇場を満喫するといった雰囲気のものが多い。

### 3-8 主題8——月を世話

月が登場する絵本においては、月は登場人物(動物)を守ってくれる優位な立場で描かれ

ることが多い。だが、逆に主人公たちが、月の世話をし、守ってあげるという物語も存在する(12件)。食事の世話(作品8)、清掃や洗浄(作品10・作品23)、風邪の看病(作品13)、孤独を癒し空に帰すこと(作品38)、月の育成(作品42)、壊れた月の修復(作品90)、毎夜中天に輝くという月の役割を支援すること(作品91)などである。

作品8『おつきさまはまあるくなくちゃ』は、ある晩、空に浮かぶ月がやせているのを発見した年配の女性が、月にスープやピザを食べさせる話になっている。世話をしたことで、月は太っていく(と女性は思っている)。作品23『つきをあらいに』では、きつねのコンタと祖父が、他のきつねたちと一緒に月を洗う話である。山の上の池の上で、空から引き下ろした月を洗う。作品13『かぜをひいたおつきさま』の場合、風邪を引いて、月が草の上で寝ている。イワンが看病して、月が元気になる。二人は色々な話をする。ある日、月は天に帰ろうとするが、自力で上れない。そこでイワンは……という物語である。友のいない若者と月の絆も描いている。作品38『きらきら きらら おつきさま』は、夜空の暗さと孤独に耐えかねて、月が地上に降りてくる。アタは、月が帰れるように頭をひねるという話である。作品42『つきとうばん』においては、ある村の親子が、今年は月当番になる。畑で月と星の種を育てて、成長したら空に返すのである。月に種があり、それを村の当番で育てるという発想はなかなか独創的だといえる。作品90『おやすみなさいをいうまえに』では、小鳥たちが月の世話をしている。寝る前には絵本を読んであげる。ある晩、月がはしゃぎすぎて、鳥の巣から落ちる。月はばらばらに壊れてしまう。うまく修復ができない。だが小鳥たちは、「おつきさまは かたちかわるんでしょ あんしんして おやすみなさい」とまた、絵本を読んであげる。小さな鳥たちが月の世話をする絵は、新鮮である。作品91『月のみはりばん』は、城の窓から、夕日を見ている三人の男の後ろ姿から始まる。「きょうはそらのしたの みんなが たのしみにしている まんまるのお月さまを そらに うかべなければなりません。月のみはりばんたちは、これから そのしたくに おおいそがしです」。寝ている月を起こして、体重をはかり、丸さが足りなければ食事をさせて、風呂に入れて、空に送り出す物語となっている。

絵本を読み、読んでもらう年代の子供にとって、「世話をする」ことの意味とはどのようなものだろうか。学校での飼育動物の世話が子供たちに与える心理的影響の研究によれば、学校の仲間とともに、適切に動物を飼うと、学校適応、動物への共感性、他者への温かさ、向社会的態度の低下の抑制が見られるという(中島・中川・無藤, 2010: 227)。

月に守られるという感覚を与える絵本に対し、月を守ってあげるという方向の絵本においても、そこには、相互的なコミュニケーションがある。世話をするという身体的な行為を伴うということは、月の守護を受ける場合よりも、より積極的なコミュニケーションであるともいえる。

### 3-9 主題9——月への往還

1969年7月16日ケネディ宇宙センターから打ち上げられたサターンV型ロケットは、やがて月周回軌道に達し、7月20日司令船コロンビアから分離した月着陸船は、月面に着陸した。アポロ11号によって、人類が初めての月旅行を成し遂げたあと、萩原井泉水は、「月から見るわが地球の円き青きうつくしきこそ」と歌った（阪西、2015：126）。

月に行き、帰ってくることは、もはや、夢物語ではない。先に紹介した作品12『ねこまるせんせいのおつきみ』では、月からの月見（地球見）が、描かれていた。作品4『月へ行きたい』は、満月の夜、男の子は月へ行く方法を考え始める。巨大な橋、塔、風船、エレベーターなどを考える。絵本の表紙は窓の外に大きな月があり、男の子は机に突っ伏して寝ている。作品59『おつきさまにぼうしを』は、ある冬の夜、サルとワニとメンドリが、月が寒そうなので、帽子・マフラー・手袋をプレゼントしようとする。でも、どうやって月へ行けばいいのか……という物語である。作品60『うさぎちゃん つきへいく』は、月にウサギがいると聞いて、月へ行くが、そこにウサギがいないので、がっかりして帰ってきてしまう話である。作品72 *Moondogs* は、月が大好きなウィルは、月にムーンドッグを探しに行く。だが、宇宙船に紛れ込んでいた地球の犬スクラッピーに助けられ、ともに地球に帰ってくる。いずれも、遠方ではなく、身近に大切なものがあるという教訓を含んでいる。作品75『つきにでかけたおんなのこ』は、空想が好きで、いつも「月にでも行ってるの？」とかわかれる女の子が主人公である。フランス語で、être dans la lune（月にいる）は、「ぼんやりしている」の意味になる。言葉の遊びから発想されたフランスの絵本である。作品115『かじってみたいな、お月さま』は、冬眠もしないでロケットを作ったクマが、さすがに眠くなって発射のカウント中に眠ってしまう。ロケットは失敗し、地上にそのままいることになる。ところが、目が覚めたクマは雪を食べて、月の食べ物だと思う。そして、また、眠ってしまう。春になって目が覚めると、月へ行ってきたと信じ込んでいる。「月への往還」の主題であると共に、「月と食欲」のテーマも扱った物語である。

「月への往還」という主題は、月そのものとのコミュニケーションは乏しい。月は、そこに到達するという現実的な欲望の対象になっているのである。

### 3-10 主題10——月の行為

月のほうが主体的に動く作品である。作品47『あみものおつきさま』は、月の善意を描く。月が子狸たちに帽子を編んであげる。大きすぎるが、子狸たちは、「わーい ふとんだ」と喜ぶ。作品69『お月さまのさんぽ』での月は、散歩に出かけて、夜の見回りをしている。ある家でビニールのプールを見つけて、月は、プールに飛び込む。作品70『おつきさまはよるなにをしているの?』は、月が、夜のカーテンを引き、星を空に描き、町の騒音を消すという仕事をしている姿を描いている。

月の悪意を描く物語もある。作品 57『おひさまとおつきさまのけんか』においては、月と太陽が喧嘩をして、やがて、月は星、太陽は雲という援軍を得て、全面戦争になる。作品 105『月のしかえし』では、より直接的な悪意が表現される。バイオリンに励むセッピーが、もっと上達したいという願いを込めて、7 夜、続けて月に靴を投げる。月は怒り、その晩に生まれた妹は、口をきけなくなる。だが、セッピーは、バイオリンを弾き続けることで呪縛から逃れる。怒る月との闘いは、生き物相手よりも恐ろしいイメージを与える。無生物が強い感情を持つということの不気味さを感じるからである。絵本の表紙は、その恐怖感をよく伝えている。月の悪意については、「ヨーロッパに伝わる誘拐する月、サモアやアメリカ北西部の怒った月、ギリシアやローマ、あるいは近東の狩りをする月、こうした月は死をもたらすものととらえられているのかもしれない」(Casfold, 2003=2010: 246) など、歴史的には多くのナラティブが存在している。

### 3-11 主題 11——月夜の出会い

主題 7 の「月夜の旅」と同じように、「月夜の出会い」というテーマは、月との相互作用と言うよりも、月の光のもとで、誰かと邂逅することに重点が置かれている。作品 56『つきよのキャベツくん』では、キャベツくんが、ブタヤマさんと月夜に散歩をしていると、向こうから巨大なとんかつが歩いてくる。作品 63『つきのゆうえんち』は、母親の帰りを待つなよが、チンドン屋について、月の遊園地に紛れ込む。そこで、母親に出会う。二人で、遊園地で遊ぶ。ジェットコースターに乗って、ぐるぐる巡り……気がつくと、帰宅途中の母親に声をかけられる。あれ、さっきのお母さんは誰だろうということになる。その時、「きょうはとくべつ」という声が後から聞こえる。そこにはキツネの影がある。作品 100『つきよのかいじゅう』は、湖のそばで、10 年間湖から怪獣が出てくるのを待つ男がいる。ある月夜、海獣が出てくる。作品 68 *Crab Moon* の表紙は、暗い海の上に満月が夜空に浮いており、手前には、男の子の背中がある。懐中電灯の光が、海への道を照らしている。月夜の晩、夏の間借りた海辺のコテッジから、散歩にでかける母と子が主人公である。潮の満ちた浜辺では、数多くのカブトガニが産卵のために集まっている。「月夜の出会い」を主題とする絵本では、月光の下、思わぬ邂逅が待っている。

### 3-12 主題 12——月と食欲

三日月は、その形から杯と考えられて、生命の水、血液、乳をたたえているとも考えられていた (Casfold, 2003=2010: 138)。「月と食欲」の主題を描いた絵本は、7 件あった。作品 43『リスとお月さま』では、リスが大きな円形のチーズを見て、月だと思う。原作は、ドイツの絵本である。

作品 89『月へミルクをとりにいったねこ』は、原作がスウェーデンのものであり、子猫

## 月の絵本

のために月にミルクを取りに行こうとする母猫の物語だ。作品 92『お月さまって どんなあじ?』も、ドイツの絵本であり、動物たちが月の味を知りたくて、カメのうえにゾウ、ゾウのうえにキリン、キリンのうえにシマウマ、シマウマのうえにライオン、ライオンのうえにキツネ、キツネのうえにサル、サルのうえにネズミがのって、月の端をかじる。「パリッ!」とかじると「なんともいいあじ」であった。みんなに分けると、「みんながそれぞれいちばんすきなあじがしました」という話である。月を見て食欲を感じる作品は、ヨーロッパのものに多く見られるが、日本の絵本もいくつか存在する。作品 28『まんまるおつきさん』は、月がおせんべい、メロンパン、お好み焼きに見えてくる話である。作品 111『お月さまたべちゃった?』では、いつも夢の中に月が出てくるクマが、ある朝起きると、お腹が光っているので、月を食べてしまったと心配する。「月の世話」の主題で取り上げた作品 8『おつきさまは まあるくなくちゃ』も、月の満ち欠けを見て、「やせた月」に何かを食べさせようとする話であった。「月と食欲」という主題が出てくる背景には、月相による「太る」「やせる」という連想が関係していることはいうまでもない。

### 3-13 主題 13——月の満ち欠け

月の満ち欠けをテーマにした絵本は、6 件であった。作品 14『月の満ち欠け絵本』は、新月から三日月、そして満月、再び新月へというサイクルをたどるタイトル通りの科学絵本である。作品 3『うそ・つき』は、月の欠けていくのは、動物たちがかじるからだ、とある小鳥がウサギに教える。「みんなうそだー」といわれ、その鳥はウソと呼ばれるようになったという話である。スズメ目アトリ科ウソ属の鳥の語源を書いた絵本となっているが、ウソは、古語で口笛のことであり、ヒーホーという鳴き声が、口笛に似ていることから名づけられたという。作品 21『おたんじょう月おめでとう 9 月生まれ くまくとつき』は、丘の上で、クマが月と話をする。クマは、月が少しずつ太っていくのは嬉しいが、だんだんと月がやせていくのは、見ていて悲しいという。この絵本に登場する満月は、クマと同様に耳があるのが楽しい。

### 3-14 主題 14——月と兎

「『月の中に棲む兎』という言説について初めて記述した文献は、紀元前四～三世紀中国の屈原の著書『天問』と言われ、漢時代の『五経通義』にも『月中有兎』と記されてあると言う」(今橋, 2013: 25)

「月と兎」を主題とする絵本は、悲しいものが多い。作品 39『つきのうさぎ むかし むかし もりのなかで』は、森の中で道に迷った老人を動物たちが助ける話である。サルは火をたいて老人の身体を温める。キツネとタヌキは、水をくんでくる。イノシシは、火でくべ

た木の根っこを食べさせる。ウサギは、自分のからだを火に投じて、食べ物として供する。作品 99『月へいったうさぎ 九月』も同様の物語である。

元々の仏教説話では、老夫に身を隠した帝釈天が、キツネとサルとウサギに食べ物を求めるという話になっている。「兎は何も差し出すことができなかったので、自らの肉を食べて欲しいと火中に身を投じた。すると老夫は帝釈天の姿に戻って火を鎮め、兎を憐れんだ帝釈天はその亡骸を運び、月の中に納めた」(今橋, 2013: 25-26) という説話である。

月には、古来、ヒキガエルやウサギがいるといわれていたが、それらは、仙薬を連想させ、不死を意味していた(今橋, 2013: 26)。また、ギリシアでは、ウサギが、月の女神ヘカテと関連づけられていたという。

作品 114『ぼんぼこ山の月』は、月にウサギがいるのをみつけた4匹の子ウサギの物語である。子ウサギの姿を見た山姥は、彼らの母親が先ほど狐師に撃たれたことを知っている。山姥は、そっと、子ウサギたちに団子を置いていく。こうした現実の一切を見ている月は、子ウサギたちに語りかける。「きをつけておかえり みんなぐっすりとねて いいゆめをごろん」。次項で触れる月と死者の主題にも通じる切ない話である。

### 3-15 主題 15——月と死者

月の満ち欠け、そして新月のように闇に包まれるという変化は、再生を感じさせるとともに、「文化によっては死をもたらしものと見なされている」(Brunner, 2010: 35)。「日本最古の物語文学」(窪寺, 2007: 81)といわれる『竹取物語』では、かぐや姫は、月へと帰っていく。その結末は、「老夫婦の嘆願や万全の警備にもかかわらずかぐや姫は絶対的力によって昇天していく。人間の願望や能力を超えた死がもつ力の支配が描写されている」(窪寺, 2007: 85)と読み取れる。いいかえれば、『『かぐや姫』の竹取翁夫婦との『別離』は、死の表徴であると解釈することができる」(窪寺, 2007: 86)。

物語の最後、かぐや姫は、「衣着せつる人は、心異になるなりといふ」(片桐他校注, 1972: 105) といって、すぐに月からの迎えの車に乗ることを拒む。自分の精神状態が変わってしまう前に、ひとこと書き置くことがあるといって、天からの使者を待たせて、文を書くのである。そして、不死の薬を添えて、近衛中将を呼び寄せて、天皇に託す。その後、天の羽衣を着せられると、「翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ」(片桐他校注, 1972: 106) と地球を去ってしまう。

「かぐや姫」という検索語で、アマゾンにある書籍を検索すると、絵本、小説、大人向けのものなど、564 件が出現する。「かぐや姫」のナラティブは現代でも大きな影響力を残している。『竹取物語』とは、「人間の生命の有限性と永遠の生を求める願望を扱ったスピリチュアルな文学」(窪寺, 2007: 81) といえる。翁たちの立場から見れば、「八月十五夜のすば

## 月の絵本

らしい月光の中に、愛娘を失う」のであり、「去る人と去られる人の愛別離苦は、中秋の月を昇天場面として意図的に設定したことによって、物語に一層切ない色彩を与えた」（倪，2009：159）といえる。

さて、月と死者を主題にした絵本としては、まず、作品5『月の貝』があげられる。東日本大震災によって家族を失ったえなが主人公になっている。えなは、自分だけが助かったことに罪悪感を抱く。ある日、裏山で出会ったおにいちゃんが月の貝をくれる。夢の中で、死者たちも月の貝をもっているのに会おう。月の貝によって、えなの苦悩は救われていくのである。作品11『月になったナミばあちゃん』は、写真で構成されるドキュメンタリー絵本といえる。看取りの後に、納棺されるシーンが続く。最後の見開き頁は、満月である。納棺には「ありがとう」、満月の写真には「さようなら」の言葉が付いている。あとがきで、作者（写真・文）は、「ナミばあちゃんの『戒名』には『月』という文字が入れられました。その夜、一年でいちばんきれいな満月がゆっくり天に弧を描きました」と述べる。作品66『ほろづき 月になった大きいおばあちゃん』は、北の町にいる曾祖母との別れを描いている。「大きいおばあちゃんにユキがまた会いにいったとき、大きいおばあちゃんは木の箱に入って、ねむっているみたいだった」。火葬した夜、空には、まるい月が出る。「ユキにはそれが空にのぼっていった、大きいおばあちゃんの月だってすぐにわかった。大きいおばあちゃんが『まんだ こいへ』といいながらてらしてくれているってわかったんだ」。絵本では、月が4つ描かれており、様々な農作業をする曾祖母がそれぞれの月の中にいる。

月は無生物である。だが、月には、亡くなった大事な人がいるというナラティブの存在を思うと、月と語ることは、「あちら側」にいてしまった人とのコミュニケーションなのかも知れない。いいかえれば、異界への「見える窓」として、月は存在するのである。

Stenglin (2011) は、空間のモダリティということを指摘している。「どこにでも存在するものだが、空間はきわめて重要なひとつのモダリティである。そしてそれは同時に深いところで本能的なものである」(Stenglin, 2011：73) というのである。

空間が狭ければ、息苦しさが伝わってくる。ほどよい空間は、快適・安全・ある程度縛られた感じを感じさせる。それよりも、もっと広い空間は、自由や公開性というメッセージを伝える。だが、その広大さがもっと大きくなると、宇宙そのものと対峙するような切迫感も感じる。

夜空に月を見上げるとき、我々は、38万4400km離れた、円く輝く天体と出会う。「拘束スケール」(Stenglin, 2011：79) がこれほど遠くにあるとき、我々は、畏敬にも似た思いに駆られる。その感情は、ローマのパンテオンに入ったときに感じたものと似ている。月との距離に比べれば取るに足りないが、それでも、高さ43m以上のドーム天井開口部（オクルス）を見上げると、超越的な何かが異教徒の観光客にも迫ってくるのである。

言語というモダリティで、空間のモダリティを表現することは難しい。だが、良くできた

絵本の場合、その絵は、読者の視線を、遥か遠くに輝く月へともたらず広がりを描くことができる。そして、そこは死者たちが眠る場所なのかも知れないと感じさせることも可能なのである。

### 3-16 主題 16——月の奪取

「月と食欲」と並んで、「月の奪取」も、興味深い主題といえる。何よりも、空から、月を持ってきてしまうのである。月を独占したいという願望にもとづいているのだろう。

作品 26『月とともだちになりたかったきつね』は、「ひとりぼっちのさみしいきつね 空から月をとりました」という言葉で始まる。キツネが、三日月を口にくわえている絵がある。「ぼくはいつもひとりきり お月さん ともだちになってよね」といいながら、ベッドに月と「ふたり」で寝る。三日月の頭としっぽが布団からはみ出している。ただ、何をしても月は黙っている。そして、何も食べないのに、太ってくる。やがて月は、「ひとりぼっちのきつねくん ぼくを夜空にもどしたら 君のともだちになりましょう」という。きつねは、山の上へ月を担いでいき、空に帰す。「きつねはさみしくありません 月を夜空にもどしたら 月はいっそうかがやいて きつねをてらしてくれました」という言葉で、物語は終わる。作品 67『ぼく、おつきさまがほしいんだ』では、モグラが月を欲しがる。棒を使ったり、木に登ったり、と工夫をする。最後は、水たまりの月を取ろうとして……。作品 108『パパ、お月さま とって!』は、「お月さまとって」という娘モニカの願いに答えて、父親が、長いはしごで月までいき、月をおろしてくる。『「ちようとよいおおきさになったとき、つれていってくださいな』と月がいう。満月の後、月は小さくなり、もちかえれる。娘は月と遊ぶ。月はどんどん小さくなり、消えてしまう。だが、やがて、空には、また、月が出ている。この話は、小林一茶の「名月を取てくれるとなく子かな」を思い起こさせる。作品 132『たくさんのお月さま』では、幼いレノア姫が、月が欲しいという。その願いに振り回される王と家来たちの物語である。アメリカで最も権威あるコールデコット賞を 1944 年に受賞している。作品 46『お月さまにげた』は、嵐の日に月が酒場に飲みに行く。笑顔でまわりを明るくする。酔った月を、空に返したくなくなり、店主が部屋に閉じ込める。だが、月は、自分の身体の満ち欠けを利用して、脱出してしまう。

### 3-17 主題 17——月は媒体

渡辺はま子が 1936 年にヒットさせた「忘れちゃいやヨ」（作詞最上洋・作曲細田義勝）の出だしは、「月が鏡であったなら 恋しあなたの 面影を 夜毎うつして 見ようもの……」と始まる。月は、コミュニケーションをする主体でもありうるし、媒体として、ある人からある人にメッセージを送ることもある。2015 年に放映された『恋仲』（フジテレビ系列）の第二回放映では、7 年ぶりに再開した男女が、その夜、それぞれのアパートで、月を眺めな

## 月の絵本

がら相手を思っているシーンがあった。現代の恋愛ドラマでも、月は媒体であるというナラティブは健在なのである。

作品 30『おつきみピクニック』では、森のカメが、月を見ながら、砂漠のカメのことを思う。月をみて誰かを想う素敵さを描いた絵本である。「月の随伴性」の主題の項でも取り上げた、作品 6 *Max and the Tag-along Moon*. では、最後の頁に、「いつだって、月を見るときは、じいちゃんを思うだろう。ずっとずっと」と書かれている。月を通して、じいちゃんとコミュニケーションをするのである。これも、先に触れた作品 65『おつきさま』において、迷子の犬やカカシは、月そのものに話しかけるが、大型船の船長は、「おつきさま、もしも わたしのこどもたちが おそらをみていたら、どうか つたえてください。とうさんは げんきだよと」、月をみあげて、ぼつんという。船長の場合、月をメディアとして、家族とつながろうとしているのである。

### 3-18 主題 18——月の人格

「月の行為」の主題において、月の善意、悪意については触れた。すでにそこには、「月の人格」が表れている。擬人化をする場合、どのような人間とみなすかということは重要になる。

作品 85『うそつきのつき』は、ダジャレに笑わない月が主人公である。最後に、「おじさんはひとりでわらいます。……ぼくのしょうたいは……うそつき」と明かされる。楽しいキャラクターの月である。先に「月の行為」の主題で取り上げたように、作品 105『月のしかえし』における月の性格には、好感を持ってない読者もいるだろう。先に触れたように絵本の表紙を見ると、月の峻厳さといったものを感じる。入り江の風景のなかで、巨大な月がこちらを見ているように迫ってくる。

「月の守護」「月の随伴性」といった主題に表れる月は、思いやりがある人格として擬人化されている。「月と孤独」「月との会話」の主題では、頼りなく寂しそうな月も登場する。「月見」の主題に出てくる月は、にこやかに地上の祝祭を眺めている感じがする。「月の世話」をするという主題では、弱々しい月の姿が見える。「月の行為」の主題においては、人間的な好奇心を持つ月も登場するし、恐ろしい強さを持った月も出てくる。実に多様であるが、いずれも、月を擬人化していることには変わりない。

### 3-19 主題 19——潮の満ち干

作品 2『月の力のひみつ』は、科学絵本である。寄せては返す波の力はどこからくるのかなど、身近な話題も取り上げる。月の力で満潮干潮があり、海の生物は生死に関わるので、海の満ち干を感じることができるといった話題にも触れている。「月夜の出会い」の主題で取り上げた作品 68 *Crab Moon*. は、満潮時に押し寄せるカブトガニと主人公の出会いを描

いている。潮が引いていくと、カブトガニも海に引き上げる。月の光のもと、潮の満ち干が実感を持って感じられる。母親と息子のあしもとを描いた絵では、ゴム草履が濡れそうな感じまで、表現されている。

### 3-20 主題 20——月夜の魅力

作品 49『ながいよるのおつきさま』は、アメリカ大陸に昔から住んでいた人々が、12 か月それぞれの満月に名前を付けていたという話である。1 月はあらしのおつきさま、2 月はゆきのおつきさま、3 月はよつゆのおつきさま……。絵は、満月の夜、赤ん坊を抱いた母親が散歩しているというものである。暗い紺青色を背景にして白い月が出ている。母子が、ゆっくりと歩く中で、12 か月の月の名前が紹介される。

「月夜の旅」の主題で取り上げた作品 129 *The Moon Jumpers*. は、子供にとっては、自宅の庭であっても、月夜の旅であることを表していた。同時に、夏の月夜の魅力を実感させる作品でもある。ウィリアム・シェークスピアの『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*) では、大工クインスが、夏の夜に *Is all our company here?* (みんな、そろっているかい?) と聞く。甘い夏の夜の開放感ということでは、*The Moon Jumpers* と『夏の夜の夢』は共通するものが感じられる。子供たちにとっても、夏の夜は、「何かが起こりそう」な気持ちになるのである。

## 4. 月とコミュニケーションをする意味

最後に、絵本の主題として、なぜ、月とコミュニケーションをすることが取り上げられるのかという基本的な疑問についてあらためて考えてみよう。その手がかりとして、ロシアのアーティストであるレオニート・チシコフ (Леонид Тишков 1953 年生) による「僕の月 (プライベート・ムーン)」プロジェクトは、色々と示唆するところが多い。

チシコフは、医学教育を受けた後、風刺画でデビューした。その後、多様な分野でアーティストとして活躍している。2012 年には、本稿でも作品 13 として取り上げた『かぜをひいたおつきさま *МАЛЬЧИК И ЛУНА*』を刊行した。2003 年から、「プライベート・ムーン」プロジェクトを開始している。2 メートルほどの長さを持つ三日月形の「自分だけの月」を世界の各地に運んで、自分と共に写真を撮る企画である。彫刻であり、写真であり、インスタレーションでもあるといえる。三日月の内部には、光源が入っているの、夜景の中で光り輝く。チシコフは、つねに月のそばに写っている。作品例をあげておこう (Trzecia Strona Księżyca, 2014)。

1. 木の途中にぶら下がっている月
2. 廃屋の中で輝く月

## 月の絵本

3. 湖上風景，チシコフと月が船に乗っている
4. ビルの屋上の角で月が輝き，向こうは街の夜景
5. 小さな橋の上，三日月を担いだ男が行く
6. 開いた窓の向こうに三日月，窓辺には月とお茶を飲むためのティーポット
7. 家の中で，風邪をひいて臥せっている月のそば，帽子を被ったチシコフが看病をしている
8. 細い隧道の向こうに月
9. 窓のある部屋，チシコフが手前，向こう側で月が毛布を掛けて寝ている
10. 巨大な団地風景が見え，一室のベランダで月が輝いている
11. 樹木の間，雪の上に三日月を引く男
12. 雪の積もった屋上に三日月とチシコフ
13. 北極圏の水辺に組まれた櫓の上に輝く三日月
14. 作業部屋の中にいる三日月
15. 雲から落ちた月が線路の上にいる
16. 電話ボックスの男，通りの向こう側のアパート，3階のバルコニーにいる月
17. 遊園地の椅子に座るチシコフと月，向こうに観覧車の夜景
18. 水族館にいる三日月
19. 三日月が道ばたに転がっており，チシコフは，大気よりもあたたかい月に暖を求めている
20. 向こうにエッフェル塔の見えるパリのビル屋上の月
21. クリスマスの夜，教会の中の月

いずれの写真も，絵本の頁のように物語を感じさせる。ちなみに最初の「木の途中にぶら下がっている」という三日月は，チシコフが「プライベート・ムーン」のプロジェクトについて，最初のヒントを得たルネ・マグリット（René François Ghislain Magritte）の「9月16日」（アントワープ王立美術館所蔵）へのオマージュともいうべき作品である。マグリットの絵と同様に，画面の真ん中には樹木が立っている。その中心あたり，樹木より手前に小さな三日月が出ているのである。

チシコフは，自らのブログで，なぜ，「プライベート・ムーン」の企画を進めるのか，ということについて，以下のように記している。

「作家のチェスタトンとは，かつて，個人的な太陽とか個人的な月がないように，個人的な信仰というものもありえないと述べている。ロシアでは，すべて事情が異なる。私たちは，人生に個別に直面する。時代の問題にもまったく孤独に相對するのである。すなわち，生と死，喪失と獲得，月，太陽，そして，人生におけるすべてのものと，ひとりぼっちで向かい合わざるをえない。ひょっとすると，誰かに助けを求められるかもしれない。だが，それでも，依然として孤独である……。しかしながら，そのことは，悲嘆や苦悩にはつながらない。

そうした類の孤独とは、私たちが存在し、ここにいること、宇宙の中心にいるということである。それは、月や他の星々がそうであるのと同じことなのである」(Tishkov, 2003)

前半では、イギリスに代表される西欧社会とは異なるロシアの状況を語っている。だが、後半になると、「すべてのものとひとりぼっちで向かい合わざるをえない」のは、それが誰もが免れ得ない実存的な孤独だからであると述べる。そして、「プライベート・ムーン」のプロジェクトについて、「月は、私たちを宇宙に結びつけてくれることで、私たちの孤独に打ち勝ってくれる」とその意味を語っている。

チシコフは、先に触れたように絵本も制作する。実際、「プライベート・ムーン」のプロジェクトは、世界中の夜に出没する「動く絵本」だともいえる。チシコフはあるジャーナリストの取材に「私たちは、多かれ少なかれ、神話的なものです」と回答した(Brooks, 2013)。つまり、「生まれたときから、私たちはおとぎ話のように世界を作るのです。そこには私たちの登場人物が住んでいます。ちょうどわたしの大好きなモーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』みたいにね」(Brooks, 2013)と述べている。おとぎ話と育ったチシコフは、その世界の中に入りたいと思っているのだと本音を明かすのである。

チシコフがいう孤独、つまり、「私たちが存在し、ここにいること、宇宙の中心にいるということ」は、彼がいうように命を持ち、自己意識を抱く者の実存的な孤独を意味する。それは、本稿で取り上げた絵本に接する幼い子にとっても、該当する。存在することの孤独は、「月や他の星々がそうであるのと同じこと」だとしたら、絵本の中の主人公が、月と語り合い、互いにひとりであることを確認しあうのも自然なことである。

いいかえれば、本論文で取り上げた月が登場する絵本は、子供たちに、「一人称的他者」を気づかせる役割を果たしている。「一人称的他者」とは、二宮(2002)によれば、「自分の中にある『自己をみつめるもう一人の自分』である」(二宮, 2002: 88)と定義される。

絵本の中で、月と語る登場人物(動物)は、月を見ながら、セルフトークをしている存在である。その際、月は、「一人称的他者」の役柄を演じている。すでに、月との会話について考察した際、個人内コミュニケーションについては触れた。まさに「人間のコミュニケーションは他者との外的なコミュニケーションのみならず、自己自身との内的なコミュニケーションによっても成り立っている」(船津, 2009: 69)のである。

諏訪(2005)は、メタ認知(自分の認知過程を認知すること)のありかたとして、「言語的思考(言語的に考えている過程)」「環境からの知覚(環境を五感で知覚する過程)」「身体動作の知覚(自分の身体部位がどう動き、その結果どんな感触を得ているかを知覚する過程)」の3過程を想定している(諏訪, 2005: 3)。

月と対面するのは、ほとんど夜間である。夜の屋外空間で得られる「環境からの知覚」は、昼間と大きく異なる。そして、月を見るためには、通常、天の一角を仰ぎ見る。この独特な

## 月の絵本

「身体動作の知覚」は、身体の記憶として残るだろう。こうして月を巡る「環境からの知覚」「身体動作の知覚」は、いずれも、メタ認知を促進する。加えて、月は、それを見る人に何らかの「言語的思考」を通したメタ認知をもたらし。そうした過程の中で、絵本の登場人物（動物）は、月を見上げながら、何らかの外言または内言をつぶやくことになるのである。

このように月という天体は、「いま月を見て何かを思っている自分」というものを知覚させ、メタ認知を促す力が大きい。月とコミュニケーションをする主人公が登場する絵本は、幼い子に、「個人が自分自身に対して話しかけ、そしてそれに応答するという、コミュニケーションの一形式」（Blumer, 1969=1991:17）を教えている。

「自我は、内省的になることによってのみ、自己となる」（Blumer, 1969=1991:80）ということを経験するなら、月ほど、幼い子も含めて、人を「内省的」にする不思議な力を持つものはない。そして、何よりも月の光は、地球上のどこでも、等しく注がれるからこそ、価値がある。

遠いところにあるものと心を通わすことができた者は、たとえ、幼い子であっても、地上の瑣事に押しつぶされることは減るだろう。月の絵本が与えてくれるのは、そうした孤独な存在の「勁さ」なのである。

絵本リスト（今回分析した月が登場する 132 作品・括弧内は、その絵本の主題を示す）

### 2010 年代

1. 高木さんご文・黒井健絵（2015）『おつきさんのぼうし』講談社（月との邂逅）
2. 関口シュン（2014）『月の力のひみつ』子どもの未来社（潮の満ち干）
3. 木曾秀夫（2014）『うそ・つき』フレーベル館（月の満ち欠け）
4. 松岡徹（2014）『月へ行きたい』福音館書店（月への往還）
5. 名木田恵子文・こみねゆら絵（2013）『月の貝』佼成出版社（月と死者）
6. Cooper, F. (2013) *Max and the Tag-along Moon*. New York: Puffin Books. (月の守護／月の随伴性／月は媒体)
7. Byrne, R. (2013) *The Great Moon Confusion*. Oxford: Oxford University Press. =2014 もきかずこ訳『おつきさまがたいへんだ！』フレーベル館（月の満ち欠け）
8. ふくだじゅんこ（2013）『おつきさまはまあるくなくちゃ！』大日本図書（月の満ち欠け／月と食欲／月を世話）
9. Stoop, N. (2012) *Red Knit Cap Girl*. New York: Little Brown and Company. (月の随伴性／月と孤独／月との会話)
10. Casarosa, E. (2012) . Glendale: Disney Book Group. =2013 堤江実訳『ルナおつきさんのおそうじや』講談社（月を世話）
11. 國森康弘文・写真（2012）『月になったナミバあちゃん』農文協（月と死者）
12. 押川理佐文・渡辺有一絵（2012）『ねこまるせんせいのおつきみ』世界文化社（月への往還／月見）
13. Леонид Тишков（2012）МАЛЬЧИК И ЛУНА. Moscow: О.Г.И. =2014 鴻野わか菜／訳

『かぜをひいたおつきさま』 徳間書店 (月との邂逅／月を世話)

14. 大枝史朗文・佐藤みき絵 (2012) 『月の満ちかけ絵本』 あすなろ書房 (月の満ち欠け)
15. かとうあじゅ (2012) 『じっちょりんとおつきさま』 文溪堂 (月見)
16. 板橋敦子 (2012) 『ぶたさんちのおつきみ』 ひさかたチャイルド (月見)
17. 間瀬なおかた (2012) 『うみやまてつどうさいしゅうでんしゃのふしぎなおきゃくさん』 ひさかたチャイルド (月見)
18. かとうまふみ (2011) 『まんまるいけのおつきみ』 講談社 (月見)
19. 市川里見 (2011) 『おつきさま、こんばんは!』 講談社 (月の守護)
20. 西本鶏介文・小野かおる絵 (2011) 『たぬきのばけたおつきさま』 鈴木出版 (月と死者)
21. 中川ひろたか文・松成真理子絵 (2011) 『おたんじょう月おめでとう 9月生まれくまくとつき』 自由国民社 (月の随伴性／月の満ち欠け)
22. 蜂飼耳文・牧野千穂絵 (2011) 『うきわねこ』 ブロンズ新社 (月夜の旅)
23. 高木さんご文・黒井健絵 (2011) 『つきをあらいに』 ひかりのくに (月を世話)
24. Dahan, A. (不明) *From the sea……to the sky*. 版元不明=きたやまようこ訳 (2010) 『おつきさまとちいさなくま』 講談社 (月との邂逅)
25. 片山令子文・片山健絵 (2010) 『おつきさまこっちむいて』 福音館書店 (月の守護／月の随伴性／月との会話)
26. アナヒタ・ティムーリヤン文・絵 おおしまソテツ訳 (2010) 『月とともにだちになれたかったきつね』 グリーンキャット (月の奪取／月と孤独／月との邂逅／月との会話)
27. 中川素子企画 パーサンスレン・ボロルマー文・絵 絵津田紀子訳 (2010) 『お月さまにいるのはだあれ』 文教大学出版編集部 (月との邂逅／月と孤独／月との会話)

## 2000 年代

28. ねじめ正一文・さいとうしのお絵 (2009) 『まんまるおつきさん』 偕成社 (月と食欲)
29. 間所ひさこ文・仲川道子絵 (2009) 『10 ぴきのかえるのおつきみ』 PHP 研究所 (月見)
30. いちかわなつこ (2009) 『おつきみピクニック』 ホルブ出版 (月は媒体)
31. ねぎしれいこ文・花之内雅吉 (2009) 『おつきみどろぼう』 世界文化社 (月見)
32. いとうひろし (2009) 『おつきさまのやくそく』 講談社 (月との邂逅／月の守護)
33. きむらゆういち文・やましたこうへい絵 (2009) 『ねえ、おつきさま どうしてほくについてくるの?』 教育画劇 (月の随伴性／月との会話)
34. Russell, N. (2009) *Moon Rabbit*. London: Macmillan Children's Books. = 2009 磯みゆき訳 『ちいさなうさぎ つきのよるのおやくそく』 ポプラ社 (月は媒体／月と孤独)
35. Liao, J. (2009) *When the Moon Forgot*. New York: Little Brown and company. (月と孤独／月との邂逅／月の守護)
36. ヨシエ (2008) 『ツキミモザ』 スカイフィッシュ・グラフィックス (月と孤独)
37. 神山ますみ (2007) 『おつきさまとあそんだよる』 講談社 (月と孤独／月の随伴性／月との邂逅／月の守護)
38. Conwat, D.& Kolanovic, D. (2007) *Shine Moon Shine*. London: Hodder Children's Books. = 2007 おがわ瞳訳 『きらきら きらら おつきさま』 評論社 (月との邂逅／月と孤独／月を世話)
39. まつむらまさこ (2007) 『つきのうさぎ むかし むかし もりのなかで』 瑞雲社 (月と兎)

## 月の絵本

40. かさいまり文・黒井健絵 (2007) 『つきのよるのものがたり』 ひさかたチャイルド (月と孤独／月との邂逅／月との会話)
41. 内田麟太郎文・渡辺有一絵 (2007) 『ぼっかりつきができました』 文研出版 (月との会話)
42. 藤田雅夫文・梅田俊作絵 (2006) 『つきとうばん』 教育画劇 (月を世話)
43. Meschenmoser, S. (2006) *Herr Eichhorn und der Mond*. Stuttgart: Esslinger = 2007 松永美穂訳『リスとお月さま』 コンセル (月と食欲／月との邂逅)
44. 谷真介文・赤坂三好絵 (2006) 『イノシシとお月さま』 佼成出版社 (月見)
45. ひだきょうこ (2006) 『おおかみとキャベツばたけ』 教育画劇 (月夜の旅)
46. 谷川晃一 (2005) 『お月さまにげた』 毎日新聞社 (月との邂逅／月を奪取)
47. しばはら ち (2004) 『あみものおつきさま』 鈴木出版 (月の行為)
48. Curtis, C. and Jay, A. (2004) *I took the Moon for a Walk*. Oxford Barefoot Books. (月の随伴性／月との会話／月を世話)
49. Rylant, C. and Siegel, M. (2004) *Long Night Moon*. New York: Simon & Schuster Books for Young Readers. = 2006 渡辺葉訳『ながいよるのおつきさま』 講談社 (月夜の魅力)
50. Henks, K. (2004) *Kotten's First Full Moon*. New York: Greenwillow Books. = 2005 小池昌代訳『まんまる おつきさまを おいかけて』 福音館書店 (月と食欲／月夜の旅)
51. せなけいこ (2004) 『うさんごろとへんなつき』 PHP 研究所 (月見／月への往還／月を世話)
52. いもとようこ (2004) 『つきのよるに』 岩崎書店 (月の随伴性／月の守護／月と孤独)
53. 山形明美文・大畑俊男写真 (2003) 『どこ？ つきよのばんのさがしもの』 講談社 (月夜の旅)
54. かのゆうこ文・田中鮎子絵 (2003) 『星うさぎと月のふね』 講談社 (月夜の旅)
55. 内田麟太郎文・山本孝絵 (2003) 『たぬきのおつきみ』 岩崎書店 (月見／月との会話)
56. 長新太 (2003) 『つきよのキャベツくん』 文研出版 (月夜の出会い)
57. せなけいこ (2003) 『おひさまとおつきさまのけんか』 ポプラ社 (月の行為)
58. くすのきしげのり文・清宮哲 (2003) 『つきよのプレゼント』 岩崎書店 (月夜の出会い)
59. Kuyper, S. and Jutte, J. (2003) *Een muts voor de maan*. Leopold = 2007 野坂悦子訳『おつきさまにぼうしを』 文溪堂 (月への往還／月を世話／月との会話)
60. せなけいこ (2002) 『うさぎちゃん つきへいく』 金の星社 (月への往還／月と兎)
61. わたりむつこ文・本庄ひさ子絵 (2002) 『おつきみパーティー』 リブリオ出版 (月見)
62. 佐々木マキ (2001) 『ムッシュ・ムニエルとおつきさま』 絵本館 (月との邂逅／月を世話)
63. のぞき咲文・絵 (2001) 『つきのうえんち』 ポプラ社 (月夜の旅／月と孤独／月夜の出会い)
64. 中川ひろたか文・村上康成絵 (2001) 『おつきみうさぎ』 童心社 (月と兎)
65. やすいすえこ文・葉祥明絵 (2001) 『おつきさま』 フレーベル館 (月は媒体／月の守護／月の随伴性／月と孤独)
66. 沢田としき (2001) 『ほろづき 月になった大きいおばあちゃん』 岩崎書店 (月と死者)
67. Emmett, J. and Cabban, V. (2001) *Bringing Down the Moon*. Somerville: Candlewick. = 2002 おびかゆうこ訳『ぼく、おつきさまがほしいんだ』 徳間書店 (月の奪取)
68. Horowitz, R. (2000) *Crab Moon*. Somerville: Candlewick Press. (月夜の出会い／潮の満ち干)
69. 竹下文子文・土田義晴絵 (2000) 『お月さまのさんぽ』 あかね書房 (月の守護／月の行為)
70. Herbauts, A. (2000) *La Luna*. Madrid: Kokinos. = 2000 木本栄訳『おつきさまはよるなにをしているの？』 ひくまの出版 (月の守護／月の行為)

1990 年代

71. 山下洋輔文・柚木沙弥郎 (1999) 『つきよのおんがくかい』 福音館書店 (月見)
72. Kirk, D. (1999) *Moondogs*. New York: Putnam Juvenile. (月への往還)
73. Ray, M.L. and Cooney, B. (1999) *The Basket Moon*. New York: Little, Brown Books for Young Readers.=2000 掛川恭子訳『満月をまって』 あすなろ書房 (月夜の旅／月と孤独)
74. 戸田和代文・沢田としき絵 (1999) 『つきよのくじら』 鈴木出版 (月夜の旅)
75. Franquin, G. (1998) *La petite fille dans la lune*. Toulouse: Edition Milan.=1999 ほりえとしゆき訳『つきにでかけたおんなのこ』 フレーベル館 (月への往還／月と孤独)
76. Banks, K. and Hallensleben, G. (1998) *And If the Moon Could Talk*. New York: Farrar, Straus and Giroux.=2000 さくまゆみこ訳『おつきさまはきっと』 講談社 (月の守護)
77. Prater, J. (1998) *On Top of the World*. New York: Mondo Pub.=1999 山口文生訳『つきのあかるいよるのおはなし』 評論社 (月夜の旅)
78. Hunter, A. (1998) *Possum's Harvest Moon*. Boston: HMH Books for Young Readers. (月見)
79. みなみらんぼう文・黒井健絵 (1997) 『月からきたうさぎ』 学研 (月と兎)
80. 竹下文子文・おぐらひろかず絵 (1997) 『ぼくのベッドはおつきさま』 教育画劇 (月夜の旅／月の守護)
81. Haas, I. (1997) *A Summertime Song*. New York: Margaret K. McElderry Books. (月夜の旅)
82. Appelt, K. and Jenkins, D.R. (1997) *I See the Moon*. Grand Rapids, William B. Eerdmans Publishing Company. (月の守護)
83. Yaccarino, (1997) *D.Zoom! Zoom! Zoom! I'm Off to the Moon*. New York: Scholastic. (月への往還)
84. きむらゆういち文・ふゆのいちこ絵 (1997) 『おつきみっておいしいね』 教育画劇 (月見)
85. 内田麟太郎文・荒井良二絵 (1996) 『うそつきのつき』 文溪堂 (月の人格)
86. Manuel, L. (1996) *The Night the Moon Blew Kisses*. Boston: Houghton Mifflin. (月と孤独／月の守護／月との会話)
87. London, J. and Fiore, P. (1996) *I See the Moon and the Moon Sees Me*. New York: Viking Juvenile. (月の随伴性／月と孤独)
88. Crews, N. (1996) *I'll Catch the Moon*. New York: Greenwillow Books. (月への往還)
89. Smedberg, A. 文 ひしきむあきらこ訳 たるいしまこ絵 (1996) 『月へミルクをとりにいったねこ』 福音館書店 (月と食欲)
90. Dahan, A. (1996) *Bonne Nuit petite lune*. Paris: Gallimard.=2002 きたやまようこ訳『おやすみなさいをいうまえに』 講談社 (月との邂逅／月を世話)
91. とりごえまり文・絵 (1996) 『月のみはりばん』 偕成社 (月との邂逅／月の満ち欠け／月の行為／月を世話)
92. Grejniec, M. (1993) *Wie Schmeckt der Mond?*=1995 いずみちほこ訳 (1995) 『お月さまってどんなあじ?』 らんか社 (月と食欲)
93. Raschka, C. (1995) *Can't Sleep*. New York: Orchard Books.=1997 泉山真奈美訳『ねむれないよるは』 偕成社 (月の随伴性／月の守護／月と孤独)
94. Gilbelt, L. and Weedn, F. (1995) *The Moon Maiden*. New York: Disney-Hyperion.=1996 ときありえ訳『ドリームメーカーストーリー (3) 月の娘 日本の民話より』 評論社 (月との邂逅)

## 月の絵本

逅)

95. 香山美子文・末崎茂樹絵 (1993) 『おつきさまのとのおるみち』教育画劇 (月の守護)
96. 宙野素子文・東逸子絵 (1993) 『月光公園』三起商行 (月の守護／月との邂逅)
97. 神沢利子文・渡辺洋二絵 (1992) 『つかまらない　つかまらない』新日本出版社 (月の随伴性／月の守護)
98. みやもとただお (1992) 『つきよにさんぽ』佼成出版社 (月夜の旅／月夜の出会い／月との会話)
99. 谷真介文・赤坂三好 (1991) 『月へいったうさぎ　九月』佼成出版社 (月見／月と兎)
100. 長新太 (1990) 『つきよのかいじゅう』佼成出版社 (月夜の出会い)

### 1980 年代

101. 長新太 (1989) 『おつきさんのき』教育画劇 (月の行為)
102. Probst, P. (1989) *Caroline sur la lune*. Paris: Hachette Littérature. = 1998 山下明生訳『カロリーヌつきへいく』BL 出版 (月への往還)
103. いわむらかずお (1988) 『14 ひきのおつきみ』童心社 (月見)
104. Caristrom, N.W. and Ormai, S. (1987) *The Moon Came Too*. London: Macmillan. (月の随伴性)
105. Aiken, J. and Lee, A. (1987) *The Moon's Revenge*. New York: Knopf. = 1995 猪熊葉子訳『月のしかえし』徳間書店 (月の行為／月の人格／月と孤独／月との邂逅)
106. Dahan, A. (1987) *My Friend the Moon*. New York: Viking Juvenile. = 1999 きたやまようこ訳『ぼくのともだち　おつきさま』講談社 (月との邂逅／月の随伴性／月との会話)
107. もりひさし文・きくちとしはる絵 (1987) 『つきがみていたはなし』こぐま社 (月夜の出会い／月の守護)
108. Carle, E. (1986) *Papa, Please Get the Moon for Me*. Natick: Picture Book Studio = 1996 もりひさし訳『パパ、お月さま　とって！』偕成社 (月の奪取／月との邂逅)
109. まついのりこ (1986) 『おつきみこびとのおはなし』童心社 (月見)
110. 長新太 (1986) 『つきよ』教育画劇 (月との邂逅／月の行為)
111. 壇晴子文・高瀬のぶえ絵 (1986) 『お月さまたべちゃった？』あすなろ書房 (月と食欲／月との邂逅)
112. Dragonwagon, C. and Pinkney, J. (1986) *Half a Moon and One Whole Star*. New York: Atheneum Books for Young Readers. (月の守護／月の随伴性)
113. 林明子文・絵 (1986) 『おつきさま　こんばんは』福音館書店 (月との邂逅／月の守護／月との会話)
114. あまんきみこ文・渡辺洋二絵 (1985) 『ぼんぼん山の月』文研出版 (月と兎／月と死者／月の守護)
115. Asch, F. (1985) *Moon Cake*. New York: Aladdin. = 1985 山口文生訳『かじってみたいな、お月さま』評論社 (月への往還)
116. 寺村輝夫文・いもとようこ絵 (1985) 『おつきさまでたよ』あかね書房 (月見)
117. 佐々木マキ (1985) 『ねむいねむいねずみとおつきさま』PHP 研究所 (月への往還)
118. Asch, F. (1984) *Moongame*. Upper Saddle River: Prentice Hall. = 1987 山口文生『どこへいったの、お月さま』評論社 (月との邂逅／月の随伴性／月の守護／月との会話)

119. しみずみちを (1983) 『ちいちゃんとじゅうごや』 ほるぷ出版 (月見)
120. Asch, F. (1982) *Happy Birth Day, Moon*. New York: Simon&Schuster. = 1985 山口文生訳『ぼく、お月さまとはなしたよ』評論社 (月との会話／月と孤独)
121. 谷真介文・北田卓史絵 (1980) 『こんやはおつきみ』金の星社 (月見)
122. 神沢利子文・井上洋介絵 (1980) 『お月さんはきつねがすき?』ポプラ社 (月見／月の随伴性)

#### 1970 年代

123. 内藤初穂文・谷内こうた絵 (1979) 『つきとあそぼう』至光社 (月との邂逅)
124. Preston, E.M. (1974) *Squawk to the Moon, Little Goose*. New York: Viking Juvenile = 1979 岸田衿子訳『おつきさんどうしたの』岩波書店 (月夜の出会／月夜の旅)
125. Ardizzone, A. and Ardizzone, E. (1973) *The Night Ride*. Harlow: Longman Young Books. = 2004 なかがわちひろ訳『つきよのぼうけん』徳間書店 (月の守護)
126. 齋藤隆介文・滝平二郎絵 (1971) 『モチモチの木』岩崎書店 (月の守護／月夜の旅)

#### 1960 年代

127. Olsen, I.S. (1965) *Drengen i manen*. Copenhagen: Gyldendal = 1975 やまのうちきよこ訳『つきのぼうや』福音館書店 (月の行為)
128. Rydberg, V. and Wiberg, H. (1960) *Tomten*. Stockholm: Rabén & Sjögren. = 1979 やまのうちきよこ訳『トムテ』偕成社 (月の守護／月夜の出会)

#### 1950 年代

129. Udry, J.M. and Sendak, M. (1959) *The Moon Jumpers*. London: Random House Children's Publishers UK. (月との会話／月夜の旅／月夜の魅力)
130. Prévert, J. (1953) *L'Opera de la lune*. Paris: Gallimard Jeunesse = 1979 内藤濯訳『つきのオペラ』至光社 (月の随伴性／月と孤独)

#### 1940 年代

131. Brown, M. and Hurd, C. (1947) *Good Night Moon*. New York: Harper & Row Publishers. = 1979 らたていしせ訳『おやすみなさい おつきさま』評論社 (月との会話／月の守護)
132. Thurber, J. and Slobodkin, L. (1943) *Many Moons*. Boston: HMH Books for Young Readers. = 1994 なかがわちひろ訳『たくさんのお月さま』徳間書店 (月の奪取／月と孤独)

#### 引用文献／ウェブサイト

- 天野幸子 (2009) 「乳児のコミュニケーション欲求, 共同注視, そして共同のかかわり」『女子栄養大学紀要』40 31-37
- アマゾン (2015) [http://www.amazon.co.jp/ref=nav\\_logo](http://www.amazon.co.jp/ref=nav_logo) 2015 年 8 月 20 日閲覧
- 浅野智彦 (2001) 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房
- Brunner, B. (2010) *Moon*. London: Yale University Press. = 2012 山川純子訳『月 人との豊かなかかわりの歴史』白水社
- Выготский, Л.С. (1934) *Мышление и речь*. Moscow: Государственное. = 2001 柴田義松訳『思考と言語』新訳版 新読書社
- Brooks, K. (2013) 'Leonid Tishkov, Russian Artist, Travels The World With His 'Private Moon'.

- The Huffington Post*. April 26, 2013 [http://www.huffingtonpost.com/2013/04/25/leonid-tishkov-private-moon-russian-artist-interview\\_n\\_3147294.html](http://www.huffingtonpost.com/2013/04/25/leonid-tishkov-private-moon-russian-artist-interview_n_3147294.html) 2015年8月10日閲覧
- Cadden, M. (2005) 'Children's Stories (Narrative Written for Children', in Herman, D., Jahn, M. and Ryan, M.L. (eds) *Routledge Encyclopedia of Narrative Theory*. London: Routledge.
- Casford, J. (2003) *The Moon: Myth and Image*. London: Octopus Publishing Group. = 2010 別宮貞徳監訳・片柳佐智子訳『図説月の文化史 上』 柊風舎
- Epley, N., Waytz, A. and Cacioppo, J.T. (2007) 'On Seeing Human: A Three-Factor Theory of Anthropomorphism.' *Psychological Review*. Vol. 114 No. 4 864-886
- Epley, N., Akalis, A. W. S. and Cacioppo, J.T. (2008) 'When We Need A Human: Motivational Determinants of Anthropomorphism.' *Social Cognition*. Vol. 26 No. 2 143-155
- Guthrie, S. (1993) *Faces in the Clouds: A New Theory of Religion*. New York: Oxford University Press.
- 廣野由美子 (2008) 『視線は人を殺すか 小説論 11 講』 ミネルヴァ書房
- Honeycutt, J.M. (2008) 'Imagined Interaction Theory: Mental Representations of Interpersonal Communication.' in Bxrwe, L.A. & Braithwaite, D.O. (eds) *Engaging theories in interpersonal communications: multiple perspectives*. Thousand Oaks: Sage.
- 今橋理子 (2001) 「く月の兎」の図像と思考 (上)」『学習院女子大学紀要』3 1-22
- 今橋理子 (2013) 『兎とかたちの日本文化』 東京大学出版会
- 糸井通浩・高橋亨 (1992) 『物語の方法』 世界思想社
- 片桐洋一他校注訳 (1972) 「竹取物語」『日本古典文学全集 8 巻』 小学館
- Keats, J. (1818) *Endymion Book III*. <http://www.bartleby.com/126/34.html> 2015年8月25日閲覧
- 国立国会図書館 (2015) 「蔵書検索・申込システム」 <https://ndlopac.ndl.go.jp/F/AS4YUGSGS6MKSF166TJ41PQJEJA5UQAGPIF1ARURYU4VF2UBC-51375?func=find-b-0> 2015年8月20日閲覧
- Kress, G. and Leeuwen, T. (2001) *Multimodal Discourse: The Modes and Media of Contemporary Communication*. London: Hodder Arnold.
- 厚生省 (1999) 「保育所保育指針」 [http://ba.boo.jp/hoikushishin/hoikuen\\_pdf/hoikushishin.pdf](http://ba.boo.jp/hoikushishin/hoikuen_pdf/hoikushishin.pdf) 2015年8月20日閲覧
- 窪寺俊之 (2007) 「日本人の古層のスピリチュアリティを求めて——『竹取物語』を資料にして」『神学研究』54 81-96
- 宮元健次 (2003) 『月と日本建築——桂離宮から月を観る』 光文社
- 中島由佳・中川美穂子・無藤隆 (2010) 「学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響」『日本小動物獣医学会誌』64 227-233
- 倪錦丹 (2009) 「竹取物語の物語性——『月』をめぐる」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』156-161
- 二宮裕之 (2002) 「内省的記述表現活動を活用する学習モデルの構築：『一人称的他者』の視点から」『愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学』vol. 48 No. 2 85-92
- 奥山敏雄 (2013) 「生の意味の位相とスピリチュアルケアの深度」『社会学ジャーナル』38 1-26
- 大元誠 (1988) 「幼児のアニミズム的思考におよぼす絵本内容の効果 (物語理解, 発達 14, 発達)」

- 『日本教育心理学会総会発表論文集』(30) 276-277
- 大元誠 (1989) 「幼児のアニミズム的思考にみられる『感』的認識 (発達1C)」『日本教育心理学会総会発表論文集』(31) 47
- Opfer, J.E. and Gelman, S.A. (2011) 'Development of the Animate-Inanimate Distinction.' in Goswami, U. (ed.) *The Wiley-Blackwell Handbook of Childhood Cognitive Development*. 2<sup>nd</sup> ed. Chichester: Wiley-Blackwell.
- 落合正行 (1993) 「知識の発達心理学」『東洋文化学科年報』8 110-119
- 尾崎恭子 (2005) 「幼児の精神発達と絵本」『中国学園紀要』4 61-67
- Piaget, J. (1947). *La représentation du monde chez l'enfant*. 3e édition. Paris: Presses Universitaires de France. =1955 大伴茂『児童心理学第2 児童の世界観』同文書院
- 阪西敦子 (2015) 「月はずつくよ」『俳句』2015年9月号 126-129
- Sendak, M. (1963) *Where the Wild Things Are*. New York: Harper & Row. =1975 じんぐうて  
るお訳『かいじゅうたちのいるところ』富山房
- 関沢英彦 (2012) 「父さんは犬: 広告における擬人化」『コミュニケーション科学』35 19-47
- Stenglin, M. (2011) 'Spaced Out: An Evolving Cartography of a Visceral Semiotic.' in Dreyfus, S., Hood, S. and Stenglin, M. (ed.) *Semiotic Margins: Meaning in Multimodalities*. London: Continuum.
- 諏訪正樹 (2005) 「身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化」『人工知能学会誌』20巻5号 1-9
- Taylor, M. et al. (1993) 'A Developmental Investigation of Children's Imaginary Companions.' *Developmental Psychology*. Vol. 29 No. 2 276-285
- 田沢安弘 (2010) 「自己欺瞞におけるセルフトークの機能に関する検討」『北星論集』47 23-37
- Tishkov (2003) 'Leonid Tishkov: art in progress.' <http://leonid-tishkov.blogspot.jp/2009/01/private-moon-poems.html> 2015年8月10日閲覧
- Trzecia Strona Księżyca (2014) 'Private Moon.' <https://www.facebook.com/media/set/?set=a.334596439962710.80788.106236799465343&type=3> 2015年8月10日閲覧
- 内田伸子 (2008) 『幼児心理学への招待』サイエンス社
- Vocate, D.R. (1994) 'Self-Talk and Inner Speech: Understanding the Uniquely Human Aspects of Intrapersonal Communication.' in Vocate, D.R. (ed.) *Intrapersonal Communication: Different Voids, Different Minds*. Hillside: Lawrence Erlbaum Associates.
- Warner, M.L. (1999) 'Our Neighbor the Moon.' *Children's Book and Play Review*. 1-5
- Watson, J. and Hill, A. (2003) *Dictionary of Media and Communication Studies*. 6<sup>th</sup> ed. London: Arnold.